

# 現地研修と訪日研修の連携

## インドネシア中等教育日本語教師研修のコースデザイン

藤長かおる・登里民子・有馬淳一

〔キーワード〕インドネシア、高校日本語教師、渡日前研修、訪日研修、現地研修

### 〔要旨〕

本稿は、インドネシアの高校日本語教師を対象にした訪日研修の実践報告である。この研修は訪日経験がなく日本語の運用力に自信がない高校教師に日本語運用力の向上と日本事情理解の機会を与えるもので、インドネシアの教育省に協力して、2006年からの5年計画でのべ100人の教師を招聘することになっている。この研修に先立ち、国際交流基金ジャカルタ日本文化センターでは2週間の渡日前研修が実施されたが、この研修の参加者は教育省が実施する教師研修の参加者から招聘されるという連続性のあるプログラムになっている。

本稿では、インドネシア国内で行われる研修と訪日研修との連携について、研修の計画、実施の段階を振り返る。研修の結果は、研修直後の研修生の満足度と学習目標に対する理解度や達成度から評価を行ったが、今後、研修で学んだことが教師としての態度の変容や授業の改善という成果につながるかどうかを評価することも必要になる。

## 1. はじめに

国際交流基金日本語国際センター（以下、「センター」と記す）が実施している訪日研修は、教師の成長に寄与する機会の一つとして、これまでさまざまな国の教師を対象に実施されてきたが、その設計にあたっては、国による外国語教育の理念や教授法の違い、理想の教師像の異なりや教授環境の差異などを把握しておくのはもちろんだが、それぞれの国において教師の成長を支援するために他にどんな機会があるかにも考慮しておくことが必要だろう<sup>(1)</sup>。ひとつの国の教師だけを対象にする単国研修<sup>(2)</sup>では、当該国で提供されている教師の成長を支援する多様な機会全体の中での訪日研修の位置付け、すなわち現地研修等とのつながりが捉えやすいため、多国籍研修<sup>(3)</sup>にない個別的なコースデザインが可能になる<sup>(4)</sup>。

本稿では、センターが2006年度に実施した「インドネシア中等教育日本語教師研修」（以下、「インドネシア教師研修」と記す）をひとつのケース・スタディとして、訪日研修とインドネシアで行われる現地研修等との連携について、分析・考察することを目的とする。

この研修は、2006年4月19日から6月9日までの52日間に渡って20名のインドネシアの普通

高校日本語教師<sup>5)</sup>を対象にセンターで実施された。この研修の実施に際しては、事前研修として、1月16日から1月28日までジャカルタにおいて2週間の渡日前研修が実施され、この研修の修了者29名から20名が選抜され訪日研修に参加した。さらに、この渡日前研修に参加する者は、インドネシア国家教育省(以下、「教育省」と記す)が国際交流基金ジャカルタ日本文化センター(以下、「JFジャカルタ」と記す)と共催で実施している教師研修(後述)修了者から選ばれるという連続性のあるプログラムになっている。

筆者のうち、登里はJFジャカルタの派遣専門家として、インドネシアで実施されている教師研修と渡日前研修を担当し、藤長と有馬はセンターの専任講師として、インドネシア教師研修を担当した。本稿では、この両者の立場から、渡日前研修とインドネシア教師研修を振り返る。

## 2. 研修の背景

### 2.1 研修の経緯

インドネシアの中等教育段階における日本語教育は、1960年代前半に高校の選択第二外国語として始まり、現在、普通高校、宗教高校、専門高校において日本語が学ばれている。第二外国語<sup>6)</sup>の履修形態には、必修科目扱いとなる「正課」以外に、「選択科目」「課外科目」の3形態があるが、普通高校および宗教高校の「語学系」と専門高校の「観光業務学科旅行業務専攻」では、第二外国語が「正課」として位置付けられていることから学習者が多く、2003年の国際交流基金の調査<sup>7)</sup>によると、インドネシアの中等教育段階の学習者は約62,000人となっており、インドネシアの日本語学習者人口の70%以上を占めている。中等教育段階の日本語の学習者はインドネシア全体に広く分布しており、ジャバデタベック(首都圏特別地域)以外では、北スマトラ州、西ジャワ州、中部ジャワ州、東ジャワ州、バリ州、北スラウェシ州などで日本語教育が盛んで、近年では、これらの州に加えて西スマトラ州でも日本語教育が盛んになりつつある。

このような広がりを持つ高校での日本語教育を支援するために、JFジャカルタは、インドネシア教育省と協力してカリキュラム・シラバス開発、教材開発、教師研修、「高校日本語教師会」<sup>8)</sup>支援、高校訪問などを行ってきた(藤長他2006:86-87)。インドネシア教師研修は、日本語教育の充実のために各地域に日本語のモデル校を作りたいという教育省初等中等教育局<sup>9)</sup>の要請を受けて開始されたもので、上記の高校のうち、普通高校の教師が対象となっている。人数は毎年20名で、2006年からの5年間で計100名の普通高校日本語教師に訪日研修の機会を与える計画である。2006年インドネシア教師研修は、この第一回目の研修にあたる。

### 2.2 高校日本語教師の背景

国際交流基金の2003年調査によると、初等・中等教育機関の教師数は532人となっているが、

JFジャカルタとジュニア専門家<sup>(10)</sup>による最近の実態調査によれば、普通高校だけで少なくとも学校数503校、教師数601名が確認されており、ますます増加していることがわかる。

普通高校の日本語教師全体の特徴としては、日本語力の面でも、教授法の面でも差が大きいことがあげられる。これは、教師養成段階が一様でないことを反映したもので、藤長他(2006: 82-83)で報告したように、インドネシアの公立高校<sup>(11)</sup>の常勤教師となるためには、大学の教員養成プログラムで所定の単位を修め、教員免許を取得し、さらに公務員試験に合格しなければならないため、教師の中心層は教員養成プログラムを持つ大学出身者で占められる。ただし、教員免許の種類には、英語やインドネシア語などの他言語や数学、地理などの他教科も含まれること、また、日本語教師枠での公務員採用が限られるために教員免許を必要としない非常勤教師の割合が高くなることから、教師としての力にばらつきが多い。最近では、日本語が履修できる高等教育機関が増えていることもあり、新卒の日本語教師の日本語力は上がってきてはいるが、全体としては、日本語能力試験で言えば3級以上の上位グループの教師もいる一方、4級以上3級未満の者が大半を占め、4級未満の教師も存在するというのがJFジャカルタのこれまでの認識であった。

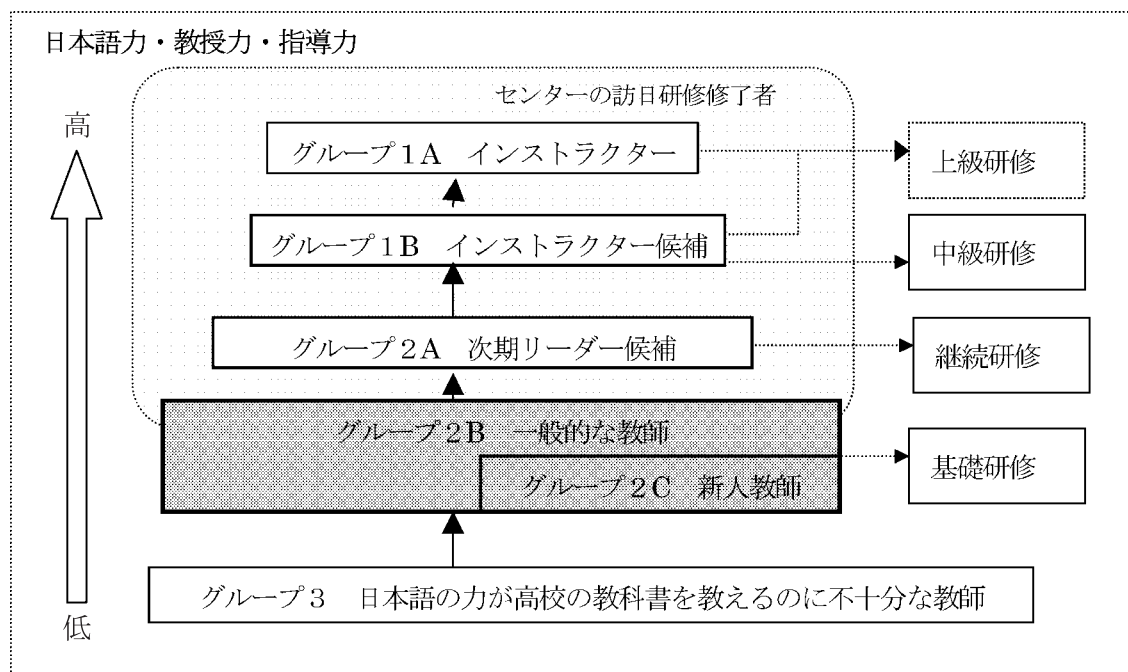
センターが実施する教師研修では、これまで数多くのインドネシアの高校日本語教師を受け入れてきたが、日本語能力試験3級以上の運用力があることが招聘条件のひとつになっているため、どちらかというインドネシアの高校日本語教師の中では上位グループの教師を対象にしてきた。それに対して、2006年に実施されたインドネシア教師研修は、日本語能力試験3級未満の者を含むインドネシアの高校教師の多数層を対象にする研修である。

## 2.3 現地研修と訪日研修の関係

JFジャカルタでは、中等教育支援を考える際、日本語力の他に教授力(授業を計画・実行・評価していく力)、指導力(他教師への指導を行う力)を加え、教師を大きな3つのグループとそれぞれのグループの上位群(A)、中位群(B)、下位群(C)に分けて考えてきた(藤長他2006: 87-89)。図1は、教師グループ別に、インドネシア国内で実施されている教師研修とセンターの訪日研修の関係を示したものである。

インドネシアには、教育省の「語学教員研修所」<sup>(12)</sup>が担当部署となっている全国レベルの語学教員のための研修制度があり、日本語教師の研修は1988年から実施されている。研修は「基礎研修」「継続研修」「中級研修」「上級研修」の4種類に段階化され、下位の研修で優秀な成績を修めた者が上位の研修に進むようになっている。そして、「継続研修」で優秀な成績を修めたものは「インストラクター候補」、「中級研修」で優秀な成績を修めたものは「インストラクター」として認定され、現職の高校教師から指導者を養成する仕組みが作られている。研修期間は「上級研修」<sup>(13)</sup>以外は2週間とされており、毎年、地域の状況に応じて全国で3～4回

図1．インドネシア国内の教師研修とセンターの訪日研修



の研修が実施されている。

「インストラクター」および「インストラクター候補」というリーダーとしての肩書きを得ているグループ1A、1Bの教師は、「基礎研修」や「継続研修」を終え、「高校日本語教師会」活動などでも指導的な立場にあり、「基礎研修」で講師役を務めることもある。一部を除いて日本語能力試験3級合格レベルの日本語力があり<sup>(14)</sup>、センターの教師研修プログラム参加者である。これからのリーダー候補にあたるグループ2Aの教師は、「基礎研修」で優秀な成績を修め「継続研修」の参加対象となる中堅の教師で、「高校日本語教師会」での活動実績があり、研修会等でも後進の指導にあたることが期待される。ほとんどが1グループの教師と同程度の日本語力を持ち、センターの教師研修にも参加済みである。1グループの教師は30人程度、2Aグループの教師は30～40人存在すると思われる。

次の層にあたる人数的に最も多い2Bグループの教師がインドネシア教師研修の対象となるグループである。高校の教科書レベル（日本語能力試験で言えば4級以上3級未満）の日本語力はすでに習得しているが、日本語でのコミュニケーションに自信がない。また、教室活動と授業設計の知識とスキルが十分でないのが特徴である。また、インドネシア国内のジャカルタ、バリ等の一部地域を除くほとんどの地域では、大学を卒業した後日本語を継続的に学べる機関がない。教育省とJFジャカルタによる教師研修や、ジュニア専門家や「高校日本語教師会」が主催する勉強会等も1日単位から長くても2週間であるため、日本語教授法を体系的に学ぶ機会としては有効であるものの、日本語の運用力を伸ばす場としては機能していないのが実状

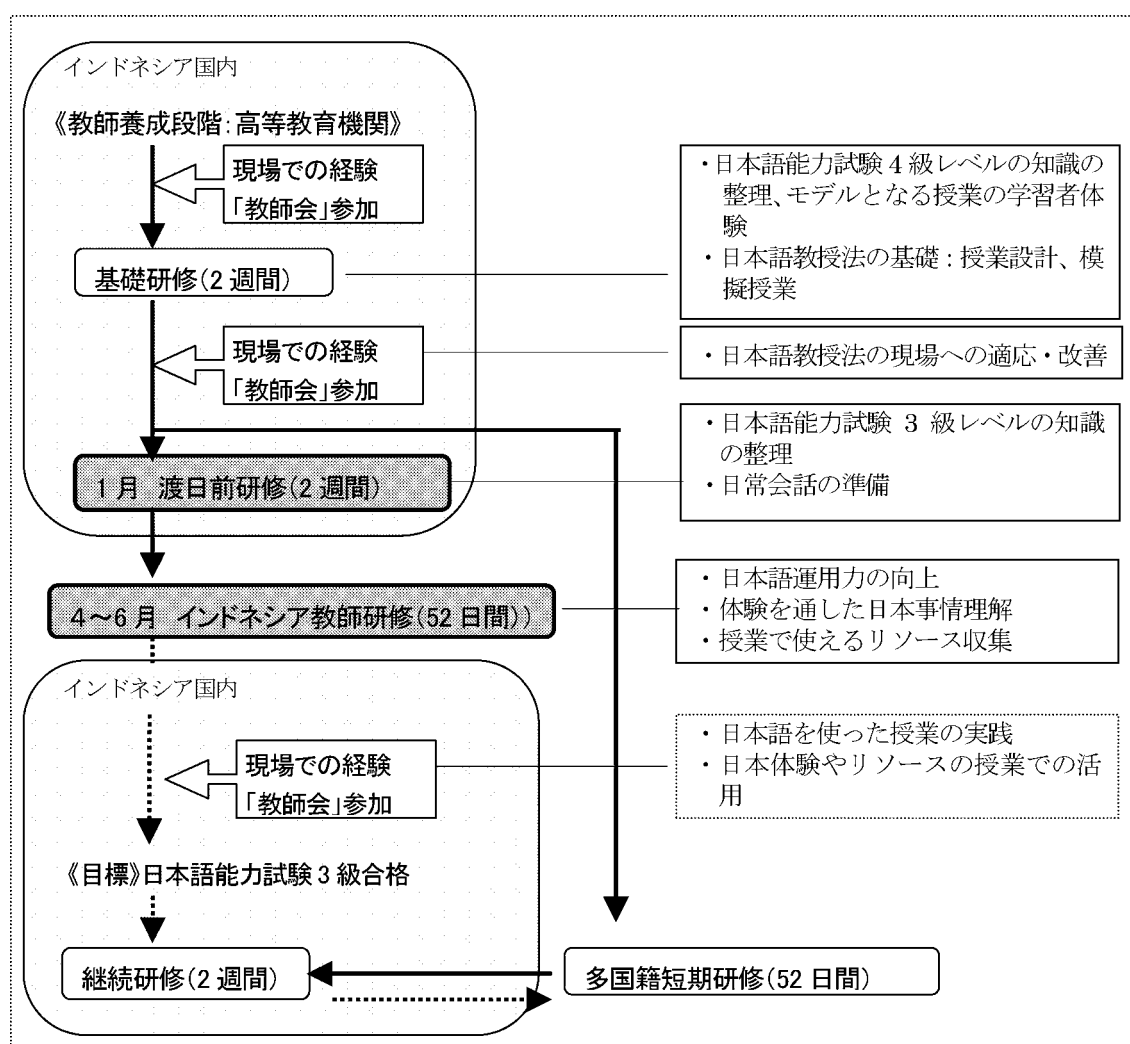
である。そこで、日本語能力不足のために多国籍研修<sup>(15)</sup>の機会が得られないこのグループは、インドネシア教師研修によって訪日研修の機会を与えたいグループとして位置付けられる。

### 3．研修のコースデザイン

図2は、インドネシア教師研修前、研修実施期、研修後の3つの段階に分けて、研修の目的や内容を概観したものである。

一般的に、大学を卒業して高校日本語教師となった者は、数ヶ月～数年の現場経験と「高校日本語教師会」での活動を経て「基礎研修」に参加する機会を与えられる。「基礎研修」は2週間で、授業は大きく「日本語演習」と「日本語教授法」に二分される。「日本語演習」で目標とされるのは、日本語能力試験4級程度の日本語能力である。また「教授法」では、導入 基本練習 応用練習という授業の基本的な流れを押さえつつ、高校のカリキュラムに基づくコ

図2．インドネシア教師研修参加の流れ



コミュニケーション重視の授業が展開できることが目標とされる。

この「基礎研修」でB以上の成績<sup>(16)</sup>を修め、更にインドネシア教師研修の参加条件<sup>(17)</sup>に合致する者の中から30名が全国から選抜され、ジャカルタで2週間の渡日前研修に参加する。渡日前研修では、訪日研修への基礎固めとなる日本語能力試験3級レベルの文法演習と、訪日研修中に研修生が遭遇する場面を想定した会話練習を主とする授業が行われる。そこで上位の成績を修め、健康問題等のない者から20名がさらに選抜されて、インドネシア教師研修に参加する。

訪日研修であるインドネシア教師研修では、渡日前研修で基礎的な練習を積んだ3級レベルの日本語の知識を基にして、運用力、とくに口頭表現力を高めることが中心になる。52日間という限られた期間であるので大きな伸びは期待できないが、日本人と日本語でコミュニケーションをすることを通して「日本語が話せる」という自信をつけることが重要になる。また、高校の日本語教師として日本語を教えるときに必要な日本事情について理解を深める機会を与えることも訪日研修の大切な側面である。すでに、「基礎研修」においてインドネシアの高校カリキュラムに合った授業設計について学び、模擬授業の機会も与えられているので、訪日研修では教授法に時間を割くよりも、帰国後授業に生かせるリソースを集める機会を与えることが主になる。

訪日研修後は、教育現場に戻り経験を積みながら「教師会」に参加して、日本語力・日本語教授力ともに研鑽の場を持つことが期待される。そして、日本語能力試験3級に合格し、また自らの教授法を振り返り改善できる能力を身につけたとき、次期リーダー候補(2Bグループの教師)に近づけるだろう。

## 4. 研修の実施

### 4.1 渡日前研修の実施

2006年度の渡日前研修には全国から30名が招聘されたが、健康問題で辞退者が出たため、実際には29名で2週間の研修を行った。クラスは事前テストによる能力別2クラス編成とした。授業は1コマ45分×87コマ行った。表1に授業時間数の内訳を示す。

渡日前研修の対象となる教師の中には、大学時代に日本語能力試験3級レベルの文法項目を一通り習った経験を持つ者も含まれているが、高校の教育現場では基本的に4級レベルの文法・語彙・漢字しか扱わないこと、また大学卒業後は自分の日本語能力をブラッシュアップする機会に恵まれないことから、3級レベルの文法項目を既に忘れていたり、文型の意味を理解できても、実際の場面で使うことができない場合が多い。そこで渡日前研修では、訪日研修への橋渡しとして以下の①②を基本方針とし、更に付随的な目標として③を設定した。

- ① 3級レベルの項目(文法・語彙・漢字)の基礎固めをする
- ② 研修生が訪日研修で遭遇する場面で役に立つ会話やスピーチを練習する

表 1 . 授業時間数<sup>注1</sup>

科 目	コマ数	基本方針 <sup>注2</sup>
文法演習（含聴解・会話練習）	67コマ	①
場面会話	7コマ	②
新教科書を使ったモデル授業	2コマ	①③
スピーチ「私の学校」	4コマ	②
漢字	1コマ	①
まとめ（ディスカッション）	2コマ	
テスト・オリエンテーション等	4コマ	
総 コ マ 数	87コマ	

注 1 . 授業時間数以外に、日本語能力試験 3 級レベルの漢字を対象とした漢字クイズを 9 回に分けて行った。

注 2 . 基本方針の①～③の番号は、本文中の基本方針の番号と一致している。

### ③ 新教科書<sup>(18)</sup>に触れ、その内容・構成を理解する

③を設定した理由は、2005年度から全国のモデル校で新教科書の試用が行われ、また「基礎研修」でも新教科書を使った教授法の授業が展開されているが、2006年度の渡日前研修の対象となった者は、全員2004年度以前に「基礎研修」を受けていたため、新教科書を使った経験のない者が多かったからである。そこで渡日前研修には、新教科書についての説明会とインドネシア人教師によるモデル授業を組み入れた。

①～③の中で最も大きな目標は①であるため、時間割の上でも 3 級レベルの文法演習に最も多くの時間を割り、また事前・事後テストにも日本語能力試験 3 級レベルの問題を使った試験を実施した。「文法演習」の中では、文法知識の確認に加えて、文型ドリル・聴解・会話練習などを行い、実際の運用力に結びつくように配慮した。

さらに、研修参加者の多くは日本語でのコミュニケーションに慣れていないことから、日本での研修生活にすぐに役立つ「自己紹介」「遅刻・欠席の連絡」等の場面を設定した会話練習と、自分の学校について紹介するスピーチの授業を行った。

また最終日には、「まとめ」として、(1) 渡日前研修で得たこと、(2) (1)の中から、すぐに自分の授業に使えるようなこと、(3) 訪日研修での目標、(4) 訪日研修で日本語の勉強以外にやってみたいこと、(5) 訪日研修までの期間に準備すべきこと、以上 5 点についてグループディスカッションを行った。

## 4.2 訪日研修の実施

図 3 は52日間のインドネシア教師研修のコース構成と流れを、表 2 は日本体験プログラムを

除く授業時間数の内訳を示している。

図3．インドネシア教師研修のプログラム構成

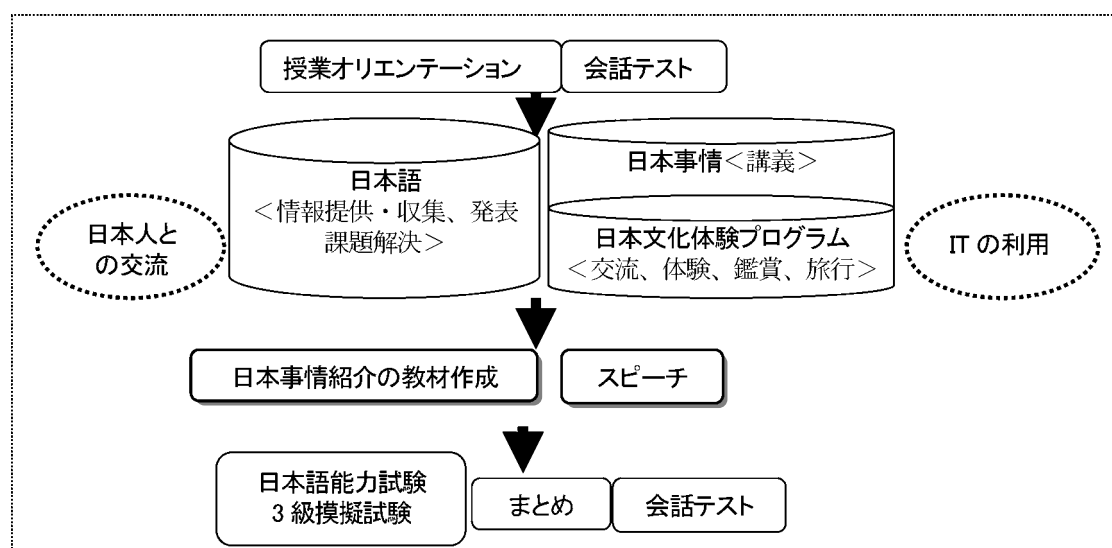


表2．授業時間数

科 目	時間数
日本語	89時間
日本事情	8 時間
教材作成ワークショップ	6 時間
「すしテスト」紹介	2 時間
IT講習	9 時間
授業オリエンテーション、テスト、まとめ	15時間
総 授 業 時 間 数	129時間

コース全体は、日本語と日本事情（講義と「日本文化体験プログラム」）を柱とした設計になっている。時間数の上では日本語中心のコースであるが、日本語と日本事情は関連しており、相互に支え合っている。たとえば「高校訪問」という「日本文化体験プログラム」は日本語の使用機会であると同時に、日本語を使って日本人の高校生や教師と交流することによって日本の高校についての理解が深まる。教授法という科目を設けていないのは、前述のようにインドネシア国内の研修でカリキュラムに合った日本語教授法を学んでいるからで、そのかわりに、訪日期間中はいろいろなリソースを集められるようにした。また、高校訪問、ホームステイなどの「日本文化体験プログラム」以外にも日本人との交流の機会をできるだけ多く授業に取り入れ、コンピュータをツールとして授業で効果的に使用することを盛り込んだ。

コースの目標は、①日本語の運用力の向上、②日本文化や日本事情の理解、③授業で使える



## 現地研修と訪日研修の連携

リソースの収集であるが、研修参加者自身が達成感を感じられるよう、日本滞在中の忘れがたい経験をテーマにした「スピーチ」と、日本滞在中に集めたリソースを使った「日本紹介の教材作成」を最終課題とした。

表3は、日本語の授業で扱ったトピック別の到達目標と、日本人との交流活動や教室外活動（「文化体験プログラム」を含む）ITの利用の関連を示している。

特筆すべき点は次の通りである。

- ① トピックの選択・配列では、日本での生活圏の広がりに合わせて、身近な場面からだんだ

表3．日本語のトピック別授業内容

トピック	時間数	到達目標	日本人との交流	教室外活動	ITの活用
わたし	2	・自己紹介できる。			MS Word を使って「自己紹介状」を作成する。
北浦和	13	・センター周辺の店へ行き、商品を探して買い物をしたり、食べものを注文したりし、商品・値段などを調べて発表できる。ポスター作成	日本人とセンター周辺の店へでかけ取材して、報告する。		デジカメ写真の「お店紹介」をPCで加工する。
旅行・交通	18	・埼玉、東京の観光スポットの情報を得て旅行の計画を立て、友達を誘って外出し、行ったところやしたことを説明できる。日記 ・外出先でのトラブル（忘れ物）に対処できる。	日本人に浦和から日帰りで行ける観光スポットについてきく。	さいたま新都心へ行って、与えられたタスクをする。	インターネットで「行き方、観光地」を検索する。
学校	9	・高校生にインドネシアと日本の相違点に気付いてもらえるようなおもしろいもの／人について簡単に紹介できる。質問カード作成 ・高校生の生活についてまとめて発表できる。ポスター作成	高校訪問：高校生に自国の紹介をする、簡単なインタビューをする。		
日常生活	8	・日常生活のいろいろな場面で許可を求めたり、依頼できる ・ホームステイのホストファミリーの紹介ができる。作文	ホームステイ：日本の家に行って、できるだけたくさん話す。		
趣味・余暇	11	・遊びのやり方を説明・理解できる。	・簡単なゲームを教え合っていっしょにする。 ・折り紙を教えてもらう。		
物語	6	・簡単な日本のストーリーを理解し、インドネシアの昔話を話すことができる。文集作成			文集の原稿を作る（任意）
料理	9	・料理の作り方について説明・理解できる。レシピ作成	・料理の作り方を教え合う。 ・いっしょに料理を作る。		レシピを検索する・書く（任意）
異文化	13	・滞日中の忘れがたい経験について発表できる。スピーチ	・日本人のゲストにスピーチをきいてもらう。		

がついているのは、「文化体験プログラム」としての活動で、授業時間数には含まれていない

ん広げていくとともに、東京見学、高校訪問、ホームステイ等の「文化体験プログラム」との関連を重視した。また、インドネシアの日本語カリキュラムに定められているトピックについても考慮した<sup>(19)</sup>。

- ② 到達目標がわかりやすく達成感が得られやすいプロジェクト型の活動を多く取り入れた。そして、達成度を「学習達成度評価シート(例:表4)」で、トピックごとに自己評価させた。
- ③ 日本人ボランティアとの活動では、「店の紹介」などの協働型の活動や、ゲームや料理を教え合う学び合いのある活動を中心にした。
- ④ 研修開始後早い段階にセンターの外に出かけ情報を収集したりタスクを遂行したりする「教室外活動」の機会を与えることによって、日本での生活を支援した。
- ⑤ ITの利用では、スキルの習得の面よりもITの便利さに気付いてもらうことを重視した<sup>(20)</sup>。
- ⑥ 最後に、日本とインドネシアの相違点に気づいてもらうトピックとして「物語」「異文化」の活動を計画した。また、話す活動においては、会話だけではなく、自分の経験や感想を発表できるような独話の機会を設けた。

語彙の予習・復習、かなの字形練習、初級文法の復習といったインドネシアの教師が日頃慣れ親しんでいる練習も適宜取り入れたが、全体としては、漢字の自律学習があるなど、自由度の高い主体的な活動が中心である。

表4.「学習達成度自己評価シート」例:トピック北浦和』の一部

できる(4) 少しできる(3) あまりできない(2) できない(1)

北浦和	道案内がわかる	4	3	2	1
	食べ物の注文ができる	4	3	2	1
	買物ができる	4	3	2	1
	センター周辺の店について調べることができる	4	3	2	1
	デジカメが使える	4	3	2	1

## 5. 研修の評価

### 5.1 渡日前研修の評価

4.1で示したように、渡日前研修の基本方針は①3級レベルの項目(文法・語彙・漢字)の基礎固めをすることと、②研修生が訪日研修で遭遇する場面で役に立つ会話やスピーチの練習をすることであった。

このうち①については、その伸びを測るために、日本語能力試験3級レベルの問題を使った試験を事前・事後テストとして課した。その結果を表5に示す。

表5．事前テスト・事後テストの結果（受験者数29名）

	事前テスト	事後テスト	
平均点	214.6/400点	218.6/400点	(+4点)
60%以上の人数	7人	9人	(+2人)

渡日前研修の対象者は日本語能力試験4級以上3級未満の日本語能力を持つ者とされていたが、実際には教員養成系大学を卒業後間もない若手教師を中心に、事前テストの段階で3級合格（60%以上）レベルに達していた者が7名いた。

事前テストと事後テストを比べてみると、平均点では4点の伸びが見られ、また3級合格（60%以上）レベルに達した者は7名から9名へと増加した。事前テストと事後テストは、それぞれ3級レベルの別の問題を使用したため、この2つのテスト結果を単純に比較することはできないが、特に伸びが大きかったのは文字・語彙で、平均点で5.2/100点の伸びが見られた。逆に聴解・文法・読解については、ほとんど伸びが見られなかった。これは2週間という短期間では、日本語能力試験で測ることができる聴解・文法能力を伸ばすことが難しいことを意味する。ただし、渡日前研修終了時に研修生に課したアンケート結果をみると、渡日前研修の文法演習で扱った38の文法事項のうち22に関して「この研修で初めて学習した」という回答があった。また、渡日前研修終了時に行ったグループディスカッションの中では、「以前に勉強した文法や漢字を思い出したり、リフレッシュしたりする機会になった」「高校の授業では扱わない文法項目の勉強ができて良かった」という声があった。これらを総合すると、渡日前研修の文法演習の授業は、高校の現場では目にしない3級レベルの文法知識に触れ、その基礎固めをする機能を果たしたと言えるだろう。

また②については、「自己紹介」「遅刻欠席の連絡」「日本でやりたいこと」という3つのトピック・場面を設定した会話練習と、「私の学校」というタイトルのスピーチを行ったが、会話練習については、事後アンケートで29名中15名が「とてもよかった」14名が「よかった」と答え、研修参加者にはとても評判が良かった。これは授業の性質上、場面が明確かつ具体的にイメージされることによって、訪日研修への期待感が否応にも高まるという相乗効果にもよるものであろう。それに対して、スピーチ「私の学校」については、29名中「とてもよかった」と答えた者は9名、「よかった」18名、「まあまあ」2名と、会話練習に比して研修参加者からの評価は低かったが、これは会話に比べてスピーチは綿密な準備と練習が必要であることと、訪日研修中に自分の学校について紹介する機会がイメージしにくかったことによると思われる。ただ、実際にはインドネシア教師研修担当者によると、自己紹介・学校紹介については全体的によくできていたとのことで、方針②については、達成されたと言えるだろう。ただし、「遅刻欠席の連絡」等、実際には訪日研修中、使う機会のなかったものもあり、次年度へ向けてシ

ラバスの見直しが必要である。

## 5.2 訪日研修の評価

### 5.2.1 テストによる評価

本研修では、最も重視されるのが口頭表現力の向上であることから研修前後にOPI (Oral Proficiency Interview) を利用した会話テストを実施した<sup>(21)</sup>。また、これとは別に、日本語能力試験という指標においても変化があったどうかを調べるために、日本語能力試験3級レベルの問題を使った筆記試験を研修終了時に実施した。テストは20名全員が受験した。

まず、OPIの結果に基づき、口頭能力の伸びについて見る。

研修終了時の結果を、略式のOPIではあるものの、訪日研修開始時におこなった会話テストの結果と比較してどう変わったかを見てみると、表6のようになる。

伸びの項目は、研修開始時点と比べて、終了時のほうがOPIの評価が上がった場合に「上」、同じだった場合に「中」、下がった場合に「下」で表す。

表6．口頭能力の伸び：訪日研修開始時と終了時のOPIの比較(受験者数20名)

開始時 (略式OPI)	終了時 (OPI)	伸 び	人 数 (人)
中級 中	中級 上		1
中級 下	中級 上		2
中級 下	中級 中		7
初級 上	中級 中		3
中級 下	中級 下		3
初級 上	中級 下		3
初級 上	初級 上		1

この結果から、開始時も終了時も「中級 下」と判定された3名と、開始時も終了時も「初級 上」と判定された1名を除く16名が、研修終了時点において口頭能力が向上したことがわかる。また、開始時の会話テストでは「初級 上」と評価された6名を含む19名がOPIの「中級」レベルになった。研修終了時で「初級」レベルだったのは20名中1名のみであった。

次に、訪日研修終了時の筆記試験の結果を渡日前研修終了時の試験結果と比較してみると、下の表7のようになる。

渡日前研修終了時の3級レベルの試験結果では、合計得点が240点以上(60%以上)で3級合格水準の者は4名だったが、本研修の終了時には20人中9名が合格レベルに達した。また、渡日前研修終了時には3級レベルの試験の総得点が50%に満たない者が8名いたが、本研修の

表 7 . 筆記試験の結果：訪日研修終了時と渡日前研修終了時の比較（受験者数20名）

	合 計 得 点 が 240点以上( 3 級合格 レベル) の者〔人〕	合 計 得 点 が 200点( 50% )未満の 者〔人〕	最高点	最低点	平均点
訪日研修終了時	9	3	345	176	238
渡日前研修終了時	4	8	331	170	214

終了時にはわずか 3 名だけであった。

科目ごとに見てみると、研修生により、聴解が著しく伸びた者、読解が著しく伸びた者、また逆に訪日研修終了時のほうが聴解の得点が低くなった者、読解・文法の点が低くなった者などさまざまであったが、個人差はあるものの、また科目差もあるものの、訪日研修の結果、研修生は全体として、日本語能力試験によって測ることができる日本語能力が向上したと言える。

## 5 2 2 研修生の自己評価

まず、訪日研修終了時に実施したアンケートの自己評価の結果に基づいて、研修生の達成度という観点から評価する。

訪日前と訪日研修終了時点とで自分がもっとも変わったこととして、9 名が「日本の生活習慣や文化についてわかるようになった」点を挙げた。また、「日本語に対する自信がついた。日本人と話すのが恐らなくなった」と 5 名が答えた。

自分の日本語の力を伸ばすためによかった活動として、「外へ出かける」「歌を歌う」「日本人ボランティアの人と話す」「会話練習」の順に挙げた者が多かった。訪日研修で提供した、センター周辺の商店街へ行ったり電車で近くの街まで出かけていったりして行った教室外活動や、日本人ボランティアとの交流活動が、研修生にとって「いろいろな経験ができ知識が増える」活動、「日本語をたくさん知り話す」活動であり、それが日本語運用力の向上のために効果的だったと受け止められたことがわかる。

次に、訪日研修を終えて日本語のどんな力や知識が伸びたと自覚しているかを見てみると、最も多かったのは「話す」力と「書く」力で、どちらも 17 名が伸びたと回答している。また、日本や日本人についてわかるようになったこととして、「(トイレ、交通、乗り物など)日本人の生活・習慣」「観光地、寺、神社など」「日本の景色、場所」「料理、食べ物」の順に続いている。

IT の利用については、「コンピュータの使い方がわかるようになった」ことについて 17 名が肯定的に回答した。ワープロソフトを使って日本語の文書を作成したり、日本語で E メールをしたりすることについても 4 分の 3 以上が肯定的に評価した。このことは教師としての態度にも変化を与えたようで、研修中 IT 講習の時間に作った教材を帰国後「すぐにクラスで使う」「今はコンピュータが使えないが、日本で撮った写真やパンフレットを使って教材を作る」と 4 分

の3以上の者が答えた。

最後に、研修生の満足度について見てみると、研修終了時の自分に満足していると肯定的に答えたのは20人のうち18人であった。来日当初は習ったことのないことばかりで、見るものも行くところもわからないことばかりで、本当に大変だったとある研修生が振り返って述べていたが、50日余りの研修生活を経て、多くの研修生が、言語的にも心理的にもだいぶ余裕ができ、それがたとえ少々わからないことでもなんとかやり遂げたり、自発的・積極的に取り組んだりすることができるようになったのだろう。それが自信となり、日本語運用力の向上やさまざまな活動での達成感となって表れ、その結果大きな満足感を得ることにつながったと言えるだろう。

### 5.3 渡日前研修と訪日研修の連携

「3.研修のコースデザイン」に基づいて実施した第一回のインドネシア教師研修が終了した。訪日研修での研修生の口頭表現力と日本語能力試験の得点の伸び、また、研修生の満足度から、渡日前研修と訪日研修の連携は期待しうる効果を収めることができたとは判断される。これは、従来の多国籍短期研修で実施している文法と教授法の授業のうち、文法の内容は渡日前研修で、教授法の内容は「基礎研修」でカバーすることができたため、訪日研修では、文法と教授法の授業は実施せず、日本語運用力の向上と日本事情理解を目指した授業を集中的に実施できたからであろう。

## 6. 今後の課題

授業の個々のデザインや内容、進め方などに改善の余地はあるが、それについて述べるのは別紙に譲り、大切と思われることを二つ述べたい。

まず、このコースデザイン全体の適切さを問う必要があるということだ。これは、個々の研修を点として見るのではなく、線として見ることを意味する。そのためには、ひとつの研修で達成したことが次の段階に繋がっているのかという検証が必要になる。

教育評価においてしばしば用いられるカークパトリックの4段階評価法(Eseryel, D. 2002)では、受講者の受講直後の満足度はレベル1、受講者の学習目標に対する理解度や習熟度はレベル2とされ、そのほかに、レベル3として学習の結果として得られる受講者の「行動」の変化、レベル4として学習によって身に付けた知識・スキルを用いて得られた「成果」も評価対象とすることが提唱されている。カークパトリックの評価モデルは、とくに企業内教育などにおいて、教育が業務に与える影響や効果を測定するという必要から生まれたモデルであるが、このレベル3、レベル4の評価は、次の段階への繋がりを考えるとき大切だろう。今回の評価は、研修直後の評価であったために、「行動」の変容や「成果」までを捉えることができなかった。

た。しかし、研修終了時に実施したアンケートで、「インドネシアに帰ってからの、あなたの日本語の授業は、日本に来る前と変わるとおもいますか」という問に全員が肯定的に答え、「生徒と話すとき、日本語をもっと使う」のように述べていることから、「行動」の変容の期待が持てる。また、20名中14名が「帰国後能力試験を受験したい。」と答えている。しかし、研修直後の意思が持続し、それが、「成果」につながったかの調査が必要になる。日本語を使う自信や日本語運用力の向上、日本体験で得た日本事情の知識が授業を豊かにしたかどうか、日本語での授業内発話に量的または質的な変化があったか、授業で日本事情を扱うときの方法になんらかの変化があったか、そして、それは学習者にどんな影響を与えたのかなど、知るべきことは多い。コースデザインの適切性は、このような調査のデータから検証されなければならない。

もうひとつ重要なことは、コースデザインの条件となるインドネシアの高校日本語教師の背景やインドネシアの国内研修等に関する情報を常にアップデートしておくことである。5カ年というインドネシア教師研修の実施予定期間中には、研修対象となる日本語教師の日本語力の変化、教師養成や研修制度の変化が予想される。常に、現状に立脚した研修計画の策定の姿勢を持ちたい。

# 〔注〕

- <sup>(1)</sup>たとえば、Roberts, J. (1998) は、教師が成長する機会として、「研修コース参加する」以外にも、「教えることを通じて学ぶ」「他の教師と協力して学ぶ」「研究することによって学ぶ」「他の教師を助けることによって学ぶ」「自分自身で学ぶ」「言語学習によって学ぶ」などの多様な機会があることを指摘している。
- <sup>(2)</sup>センターで2006年度に実施される単国研修としては、インドネシア中等教育日本語教師研修、大韓民国高等学校日本語教師研修、中国中等学校日本語教師研修、中国日本語教師研修がある。
- <sup>(3)</sup>多国籍研修とは、いろいろな国および地域の研修生を対象にした研修を指し、センターで実施されている研修としては、海外日本語教師研修（春期）、同（夏期）、同（冬期）、および海外日本語教師長期研修がこれにあたる。
- <sup>(4)</sup>たとえば、生田、北村（2006）には、タイの中等学校日本語教師研修における日本語国際センターとバンコク日本文化センターの連携の報告がある。
- <sup>(5)</sup>SMA：Sekolah Menengah Atasを指す。宗教高校（MA：Madrasah Aliyah）専門高校（SMK：Sekolah Menengah Kejuruan）と区別するために、直訳の「高校」とせず、普通高校という訳語を用いる。
- <sup>(6)</sup>普通高校および宗教高校の第二外国語は日本語、中国語、フランス語、ドイツ語、アラビア語、専門高校の場合は、日本語、中国語、フランス語、ドイツ語と定められている。
- <sup>(7)</sup>独立行政法人国際交流基金（2005）『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2003』凡人社による。
- <sup>(8)</sup>インドネシアには、行政上認知されている教科別の教師会（MGMP）があり、教師に情報交換や相互学習の機会を与えている。日本語教師会は、バリ州、西ジャワ州、東ジャワ州、中部ジャワ州、ジョグジャカルタ特別州、北スマトラ州、西スマトラ州、北スラウェシ州、ジャボデタベック（首都圏特別地域）、南カリマンタン州の10箇所組織されている。

- <sup>(9)</sup>当初、インドネシア教師研修の担当部署は教育省初等中等教育局であったが、2007年度から「教育省教職員の質改善総局」に移管される。
- <sup>(10)</sup>2006年現在、インドネシアには、国際交流基金より6人のジュニア専門家が各地に派遣されており、配属地域のカウンターパートであるインドネシア人教師の教授力・日本語力の向上にあたる他、「高校日本語教師会」支援、地域の高校訪問など、地域に密着した日本語教育支援に従事している。
- <sup>(11)</sup>インドネシアの公立高校とは国立高校を指す。国立高校の常勤教師とは、国家公務員であることを意味するが、私立高校の場合は学校独自の採用となる。
- <sup>(12)</sup>PPMP: Pusat Penjamin Mutu Pendidikanを指す。直訳すると「教育質保証センター」となるが、本稿では、旧称を訳語として用いる。実施段階では各州におかれた教員研修所(LPMP: Lembaga Penilaian Mutu Pendidikan)と協力することもある。
- <sup>(13)</sup>「上級研修」は、特別目的のワークショップという位置付けで、まだ実施実績がない。
- <sup>(14)</sup>現在のインストラクターは「中級研修」受講経験なしに、インストラクター制度発足時ベテラン日本語教師の中から語学教員研修所に任命された。そのため、日本語力にばらつきがある。
- <sup>(15)</sup>これまで、インドネシアの高校日本語教師のうち日本語能力試験で3級相当以上の日本語力を持つ者は、センターの「海外日本語教師短期研修(春期)」に参加することが多かった。
- <sup>(16)</sup>基礎研修の成績は、日本語能力と模擬授業による日本語教授力からA, B, C, Kの4段階で評価される。このうちA~Cは合格、Kは不合格である。
- <sup>(17)</sup>2006年、2007年度のインドネシア教師研修参加条件は、「基礎研修でB以上の成績」の他、①年齢45歳以下、②D3(大学三年課程)以上の学歴、③教師経験2年以上、④日本語能力4級程度以上3級未満、⑤現在普通高校で教鞭を取っていること、⑥滞日経験がないことである。
- <sup>(18)</sup>教育省初等中等教育局とJFジャカルタが協力して作成している高校用日本語教科書「にほんご1・2(Buku Pelajaran Bahasa Jepang 1/2)」を指す。2006年10月現在、1・2それぞれの試用版が既に完成し、2の試用が行われている。
- <sup>(19)</sup>カリキュラムでは、「アイデンティティ」「学校」「日常生活」「食べ物」「旅行・交通」「趣味」「健康」「将来」の大きなテーマについて学習することが定められている。
- <sup>(20)</sup>齋藤(2003: 162)は「有益で、かつ実践的な授業活動例を実際に見せたり、作る研修内容が大事である」と述べているが、今回の研修では、コンピュータの使用経験がない者も多く、帰国後すぐにコンピュータが使える環境にない点に考慮し、ITの便利さを実感できるようにした。
- <sup>(21)</sup>研修開始時は、OPIの手法を利用した15分程度の会話テストを、終了時は30分間のOPIを実施した。

#### 〔参考文献〕

- 生田守、北村武士(2006)「単一国研修における海外センターと国内の連携：タイ中等日本語教師研修の場合」『国際交流基金日本語教育紀要』第2号、97-104、国際交流基金
- 齋藤アボット佳子(2003)「日本語教師のための情報通信技術(IT)研修の在り方と今後の課題」當作靖彦編『日本語教師の専門能力の開発：アメリカの現状と日本への提言』、155-166、社団法人日本語教育学会
- 藤長かおる、古川嘉子、エフィ・ルシアナ(2006)「インドネシアの高校日本語教師の成長を支援する教師研修プログラム」『国際交流基金日本語教育紀要』第2号、81-96、国際交流基金
- Eseryel, D. 2002, *Approaches to Evaluation of Training: Theory & Practice*  
[http://ifets.ieee.org/periodical/vol\\_2\\_2002/eseryel.html](http://ifets.ieee.org/periodical/vol_2_2002/eseryel.html)
- Roberts, J. 1998. *Language teacher education* London: New York: E. Arnold